



世田谷文学館友の会

会報 第62号

2022年12月13日
 世田谷文学館友の会
 〒157-0062
 世田谷区南鳥山1-10-10
 世田谷文学館内
 FAX 03-5374-9120
 ホームページ
<https://setabuntomo.net/>

世田谷文学館・世田谷文学館友の会共催講演

世田谷文学館館長 亀山郁夫氏

「人生百年時代のドストエフスキー」

平尾 隆弘

去る七月九日、文学館と友の会による共催講演「人生百年時代のドストエフスキー」が開催された。語り手は、名古屋外国語大学学長・当館館長の亀山郁夫氏である。

長引くコロナ、ロシアによるウクライナ侵攻、講演前に勃発した安倍晋三元首相銃撃事件……暗い世相の続く中、勇気ある発言を続けてこられた亀山氏の生の言葉をぜひ聞きたい。会場は、「静かな熱気」といふべき空気に満たされていた。開口一番、最新刊の著書『人生百年の教養』に触れつつ、「教養は共有されて初めて教養と言えます。孤独な知的快楽にとどまらず、知的な喜びを共有しあうことが大切で、世田谷文学館と友の会は、まさにそうした場所だと思っています。」と語られた。現に、「今・ここ」を共有しあっている聴衆への力強いエールである。（注・文中「」でくくった箇所は、すべて亀山氏講演・著書からの引用です。）

講演は、ドストエフスキーの作品と亀山氏の人生を交互にクロスする形で進められた。《自分とは何かと徹底的に考えることの中から「教養人」は誕生します。》こう語る亀山氏にとって「自分が自分であること」を決定的に認識した事件が、中学三年生、十五歳のと

きの『罪と罰』との出会いだった。

《とりこになって読み、主人公のラスコリニコフにすっかり同化してしまいました。彼が金貸しの老婆を惨殺する場面では、一種セクシユアルな快感を得たのだと思います。翌朝、ブラスバンドの部活に出かけるため自転車のペダルを漕いだ瞬間、「俺は逮捕されるかもしれない」と怖くなったのを覚えています。還暦前、故郷（宇都宮）で講演した折、当時の友人が「郁夫君、郁夫君とはブラスバンドの練習のあと一緒に帰ったけれど、郁夫君は、自分の手から血の臭いがすると言っていたよ」と書き送ってくれました。》



講演者 亀山 郁夫氏

2022年7月9日
 於：世田谷文学館

それだけではない。還暦を過ぎてからも、惨殺された老婆の血のイメージは夢に現れるほどだというから、亀山氏の並外れた同化力（共感力）に心底驚嘆する。と同時に、若き日に書物から受けた衝撃は、たんなる衝撃に留まらず、「自分を知る」最良の契機となる（ないうる）ことを、教えられもする。以下、

講演を軸にその経緯をたどってみよう。

『罪と罰』に続く《第二の憑依体験》は『悪霊』だった。ドストエフスキー自身が「自分の魂の中からつかみ出してきた」という悪魔的主人公、スタヴローギンに、すっかり魅了され、東京外大卒論のテーマに『悪霊』を選ぶ（ドストエフスキー、悪の系譜について）。しかし、卒論執筆後、指導教官の評価によって、深い反省が訪れた。《私はスタヴローギンとの一体感のなかで、彼が告白する悪の世界にどっぷりと身を浸してしまいました。》同化の能力が文学の才能だと思い込んで《登場人物なり、テキストなりをしっかりと対象化し、批評するということの意味が理解できなかったのです。》《批評意識が欠けているということとは、自分に対して無批判であるということと同義です。》——こんな率直な発言に出会うと、聴衆もまた素直な気持ちになり、亀山氏に同化したくなるから不思議である。

東京外大卒業後、亀山氏はドストエフスキーから離れ、フレイブニコフという未来派詩人の研究に十七年間（！）の歳月を費やした。《時間だけではありませんでした。命もかけたのです。》《この孤独に耐えることがなかったら、私はその後何ひとつ自信をもって語ることはできなかったでしょう。》さらに前衛詩人マヤコフスキーをはじめ、スターリン体制下における芸術家たちの考察にも取り組んだ。そして遂に、ドストエフスキーの世界に再び帰っていくことになる。氏は自らの人生を振

り返り《一、「私」への執着 二、「私」からの逃走 三、「私」への回帰 四、「私」からの自立》の四段階に分けているけれど、執着も逃走も回帰も、すべてドストエフスキーとの関係と重なりといえよう。ドストエフスキーは《夢想家からリアリストへの変貌》を果たした人だ。亀山氏もまた、ドストエフスキーとの格闘によって、夢想家からリアリストへの変貌を実現したのではないだろうか。《リアリズムは恐ろしい悲劇を人間にもたらす。》と喝破するリアリストに。

『カラマーゾフの兄弟』の新訳が刊行開始されたのは二〇〇六年。亀山氏は事も無げに新訳の分量を、『カラマーゾフ』三三〇〇枚、『罪と罰』二二〇〇枚、『悪霊』二五〇〇枚、『白痴』二六〇〇枚、『未成年』二八〇〇枚、『賭博者』六〇〇枚、『地下室の手記』四五〇枚……と言われた。気が遠くなりそうな仕事量に、ため息（むろん感嘆の）をつきたくないのは筆者だけではない。

亀山氏によれば、ドストエフスキーは自分の人生のトラウマ（地主だった父親が農奴に殺害されたこと、革命勢力に加担した罪で死刑判決を受けたこと等）にこだわり続けた作家である。が、彼は、十九世紀後半のロシア社会が直面した、もろもろの危機と矛盾の解決を目指す作家でもあった。従って、ドストエフスキーに真に回帰し共感するためには、ロシアにおける歴史と文化のダイナミズムを理解しなければならぬ。加えて、小説中の描写には相反し矛盾する表現がいたるところに顔を出す。本音なのか？ 官憲をごまかす演技なのか？ 何しろ《ドストエフスキーに本音はありませんでした。彼は根本から引き裂かれた人間だったからです。》しかし諦め

てはいけない。命がけで読み込んでいけば、《生の全体性を肯定したい》とするドストエフスキーの意図が確かに見えてくるはずだ。「父親殺し」、「模倣の欲望」、「使喚」（しそう）そそのかし」といった概念は、《命がけの読解》のキイワードになる。詳述できず申し訳ないのだが、とりわけ「三枚舌」と「黙過」（もつか）知っていないながら黙って見過ごす）は、《スターリン時代の文化を考える際にも、ドストエフスキーの作品を分析する際にも、この二つのキイワードを繋ぎ合わせるかたちで仕事をしてきたのです。》というほど重要な概念になっている。

残り時間が切迫する中、亀山氏はパワーポイントで十二の「ドストエフスキーの言葉」を紹介された。なかでも一番好きなのは《人を愛するものは、人の

喜びをも愛する。》（『カラマーゾフの兄弟』）だという。氏が常に自戒する「驕り」の対極にある言葉であろう。ちなみに筆者も、亀山氏の著作から好きな言葉を引かせていただく。

《読書とは、要するに他者を受け入れることなのです。》（『人生百年の教養』）

《結局、文学というのは、幸福の一形式なのであって、幸福のさまざまな形を人に伝えるのが、その使命なのだ、ということ。要するに、生きる力を与えるのが文学なんですね。》（『ロシア 闇と魂の国 家』）

亀山先生、素晴らしい講演をありがとうございました。（友の会会員）

わたしの一冊

江國滋 闘病日記『おい、癌め、酌みかはさうぜ秋の酒』

1997年12月20日 新潮社刊

伊藤 正明

江國さんは、作家・江國香織さんの父君である。演芸評論家で随筆家、俳人と軽妙洒脱な方だった。一度だけお会いしたことがある。先輩と呑んだ二軒目に、小さなバーに入った。先輩は座なり「あ、先生」と声を上げた。私の隣につくねんと江國さんが座っておられた。

それから三人で楽しい会話が止まることなく、気づくと江國さんがちょこちょこっと手慰みのようなことをされ出した。見ると手品である。消えたり現れたり。バーのママは「あらあら、先生、よっぽど楽しいのね。こんなにされることないもの」と目を丸くした。マジックもプロ並みだったのだ。それからさらに痛飲し、酩酊した。

その後しばらくして食道癌であることが伝わり、ほどなく亡くなられた。享年62。私はとっくにその歳を越えた。187日間の闘病日記と223句が収録された本書は、没後に上梓された。日記なので日々の行間と十七文字を淡々と追うばかりだが、句の中から少し。

春の闇阿鼻叫喚の記憶あり

毎日が「以下同文」よ三月尽

帯に瀬戸内寂聴さんが書かれたものの一部を借用させていただく。

「命かけたものは傑作に決まっていますよ」

「そうか、命をかけているのか」

江國さんはそう言って、急に沈黙した。

寂聴さんにしても、病床を見舞った小三治さん、小沢昭一さんにしても、すでに物故された。本書の題名は、辞世の句でもある。

（友の会会員）

道探検

中野 京子

世田谷に引越して二十年ほど経つが、いまだ近所を歩いていてさえ迷子になるのだから情けない。

理由ははっきりしていて、観察力が無いばかりか、方向感覚も乏しいこと（陽が出ていれば東はわかるけれど、曇り空ではお手上げ）。そこへもってきて世田谷の道は、とにかく曲線と凹凸が多すぎる。

北海道の平坦な町に生まれた。山らしい山はなく、高い建物も少なく、見晴らしがよかった。オランダの風景画と同じで、空が画面の三分の二を占めるほど広々としていた。街並みも直線的だった。村から町へと自然発生してそのまま成長してきたわけではなく、何もない場所に計画的に作られた町なので、中心部は特に平安京なみの直線と直角だった。

つまり道を曲がれば、基本的にそれは九十度で、もう一つ先の道とはレールのように平行——それが道というものだ。幼いころに刷り込まれてしまったため、世田谷はラビリンスそのものだ。窪地に入ろうものなら、さっきまで見えていたものが見えなくなるし、曲がり道が実は三十度だったり百二十度だったりして、まっすぐ進んでいるつもりが、いつのまにやら元の場所にたたずんでいた、などということも起こってしまう。「ここはどこ？」 わたしは誰？」状態だ。

そしてそれこそが面白くてしょうがない。大学で教えていたころは家と駅と買い物の場所だ

けを覚えて、それで十分だった。そのうち物書きの仕事が忙しくなり、六年ほど前に大学は辞めることにして、家でパソコンとにらめっこ生活となって運動不足を実感。そこで散歩とサイクリングを自分に課すことにしたが、これまでどのスポーツジムも長続きしなかったたので、我ながらあまり期待せずの開始だった。

今日は東へ走ろう、明日はあの道を歩こうと、かなりいきあたりばったりの道探検で、何回も何回も迷子になり、行き会う人に尋ね尋ねて、ようやく家に辿り着くということを繰り返した（現在進行形）。帰ると必ず地図で確認し、どこで迷ったかをチェックする。最初のうちはどの道を歩いたかもよくわからず、地図を見ても突き止められないことが少なくなかった。そんな場合は翌日もまた同じ道を歩いたり、行き帰りを逆コースにして試すのだが、すると今度は違う箇所で迷ったり……。

世田谷は名のとおり、田んぼと谷の土地だったのだ。農地と森と丘と谷の、昔からの古い土地。道は人が歩いて自然にできたものが多いので曲線になるのは必然だ。そして樹齢数百年といった、大きくて立派な木がそここちに立ち、城跡もある。川は残念ながらほとんどが暗渠になっているが、緑道として蛇行し、過去を伝える。三叉路も多く、そこにはたいてい可愛らしいお地藏さまが祀られている。神社やお寺もたくさんあって、なんとなく祈りの地区という感じがして心が休まる。完全に世田谷道探検に嵌った私です。

（作家・ドイツ文学者）

執筆者紹介 著書に『怖い絵』シリーズ、『フェルメールとオランダ黄金時代』『名画の中で働く人々』など。月刊『文藝春秋』にて「名画が語る西洋史」を連載中。世田谷区在住。

ヨソの文学館・記念館
【台東区立一葉記念館】

友の会の文学散歩の候補として常に挙がるが中々実現しないのが台東区竜泉界隈である。何故なら樋口一葉の旧居跡と「一葉記念館」があるだけだからだ。しかし、その記念館は実に飽きない。一階はルーツ、つまり一葉の父母、出身の山梨樋口家の人々などを紹介している。

二階には展示室が二室。一室は萩の舎時代から文筆家を目指し紆余曲折を経て奇跡の十四カ月に至る日々を辿る常設展。もう一室では随時企画展が開催される。以前訪れた時、一度目は『たけくらべ』入門、二度目は「一葉の真筆」であった。三階は、二十四歳で夭折した一葉終焉と吉原を取り巻く明治という時代像の展示。『たけくらべ』文頭に描写される三階建ての妓楼の写真。落語や時代小説でしか見るこののできなかった「玉菊灯籠」の実物を初めて見る。そして何よりも感動したのは、辻村寿三郎の一葉人形である。皆が思う一葉よりも、もつとがつしりして太っていて、でも確かに一葉なのだ。もう少し長生きしていただけたらとの彼の思いが伝わってくる。この一葉はこの先どんな作品を残したのかと。

友人は、三十年前卒論のために訪れたという。現在の記念館は平成十八年に建て替えられたが、展示資料の有り無しをあれこれ話す。確かに行くたびに違う樋口一葉を見せてくれる記念館である。

所在地 東京都台東区竜泉三十一—一八—四

電話 〇三—三八七三—〇〇〇四

入館料 三百円（定休日月曜日）

（友の会会員 坂田美代子）

文学散歩 樋口一葉生誕一五〇年

本郷で暮らした時代を辿る

桜木の宿（少女時代）、菊坂（一葉の井戸）、丸山福山町（終焉の地）に参加して

皆越 陽子

地下鉄・本郷三丁目駅から本郷通りを北に歩くと東大赤門が現れます。今回、講師の松山信洋先生や友の会の皆様とともに、「文の京・一葉文学のまち」を訪れました。

はじめに赤門前から本郷通りを渡り、向いの浄土宗法真寺の境内にはいります。「一葉の作品『ゆく雲』の中に「上杉の隣家は何宗かの御梵刹（おんてら）」

さまでに、寺内広々と桃桜いろいろ植えわたしたれば、此方の二階より見おろすに、雲は棚曳く天上界に似て、腰ごろもの観音さま濡れ仏にておわします御肩のあたり、膝のあたり、はらはらと花散りこぼれて……」とあり、文中の「御梵刹」が浄土宗法真寺です。また濡れ仏は、現在、本堂横に安置されている観音像で横には一葉銅像も並んでいます。「此方の二階」とは、境内のすぐ東隣にあった一葉の家のことです。樋口家は、明治九年から明治十四年までの五年間、一家でこの地に移り住み、父の仕事も順調で最も豊かで安定した時代を過ごしました。

再び本郷通りに戻り、赤門のはす向いに宮沢賢治の職場「文信社」跡を見て、菊坂の入り口に向かいます。角にある「勸工場」跡は、現在のショッピンモールのような施設で、一葉も妹と共に付近を散歩したようです。菊坂を下った中ほどには花巻から上京した宮沢賢治の下宿跡があり、妹としての肺炎悪化の知らせがあるまでの大正十年一月から八月の間

ここで過ごしました。日中は文信社で筆耕や校正仕事で自活、昼休みには街頭で日蓮宗の布教活動、並行して童話集や詩集の原稿を一日三〇〇枚ほど書き上げたそうです。

さらに菊坂をくだり、鑑坂と交わるあたりに一葉旧居跡と井戸があり、付近には古い家屋も多く、当時の面影を残しています。十七歳の時、父と長兄の死により樋口家の女戸主となり、一葉への期待が大きかった父のために「何をしても筆で家族を養わなければ」と懸命に働きました。針仕事の内職のかたわら、萩の舎で歌塾生指導や作家半井桃水に師事、「文学界」同人との交流。下谷龍泉寺町で雑貨店を営むこともありました。苦しい家計をやりくりするため、たびたび伊勢屋質店に通い、終生縁は続いたそうです。

菊坂下を西片に向かい高層マンションが立ち並ぶ風景の中に、丸山福山町一葉終焉の地、日記『水の上』、その名の由来となった庭の東側の崖付近、こんにやく閻魔堂の源覚寺や銘酒屋街跡（『にぎりえ』）。

小説の場面を思い起こさせる場所や住居跡をめぐり、一葉・樋口夏子の碑とともに一葉の確かな存在感を得て、楽しく貴重な時間をもつことができました。（友の会会員）



小石川、源覚寺こんにやく閻魔堂の前で。

「嘘をいふと盆が来るに閻魔様へお参りが出来まいぞ」(『にぎりえ』より)
(撮影 2022. 5. 18)

(国土地理院の地図等を編集・加工)

朔太郎の「猫町」から時空を超えて 新開地「下北沢」を歩く

秋季文学散歩に参加して

松崎加寿子

今年、萩原朔太郎没後八十年、全国五十二か所の文学館などでこのイケメン詩人の企画展が開催されるという。

一八八六年群馬で生まれ一九四二年世田谷で没した。とくに晩年十年間は世田谷在住であったというところで、世田谷文学館企画展「月に吠えよ、萩原朔太郎展」にAUTHENTICな感じがした。

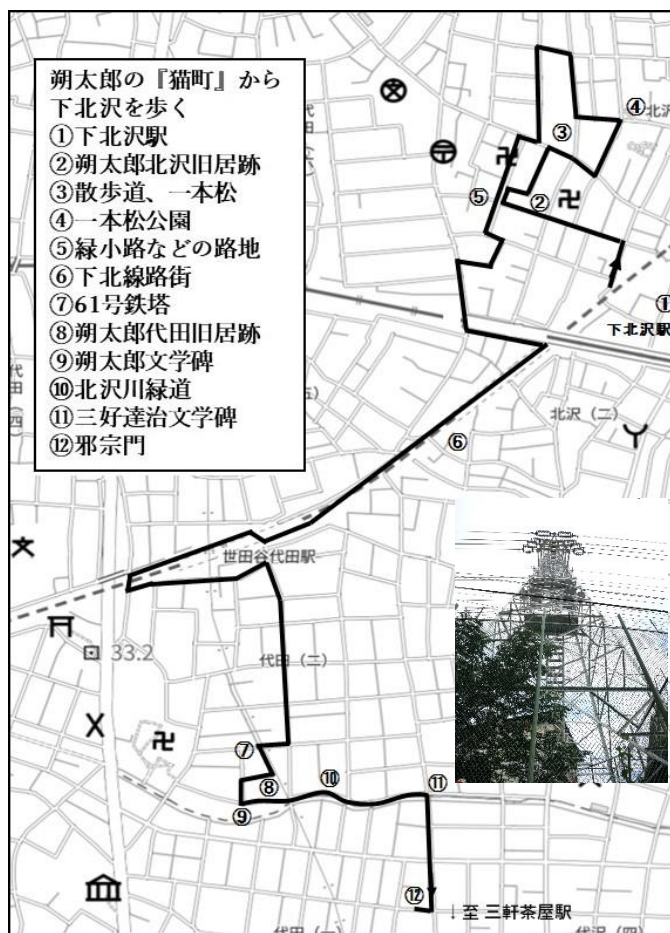
そして、秋季文学散歩は案内人に文化探査者・作家・北沢川文化遺産保存の会主幹のきむらけん先生を迎え『朔太郎の「猫町」から時空を超えて新開地「下北沢」を歩く』というちよつとミステリアスなタイトル。ともあれ十月十日に参加、変貌した下北沢駅に一同集結。先生によれば、詩人吉増剛造をして「ああ下北沢裂くべし、下北沢不吉、日常久しく恐怖が芽生える、なぜ下北沢、なぜ」『黄金詩篇』思潮社」といわせた下北沢。しかも「次元の穴」なるものがあるといわれる。いよいよワクワクしながらの散策が始まる。

まずは下北沢駅近い最初の住居。いまは店舗になっている。その裏口からは路地が続く。詩人はこの路地坂を下り、行き当たりの一番街タバコ屋に寄り赤いポストに怪しい手紙を投函し、もしかすると少し上り坂になるけど、緑、樹木多い御殿山小路なる屋敷街まで散歩したのか。

道は不思議だ。そこを歩くだけで過去の空気も吸える様な気がする。

が、「次元の穴」は見つからないなと思っていると、こんどは五月全面開通の下北線路街を通り代田へ向かう。一九三三年に朔太郎は代田に移り住む。先生方が奔走され世田谷地域風景資産となった「代田の丘の六一号鉄塔」の下に、朔太郎自らが設計した三角屋根の家はあった。この鉄塔付近は一九四五年五月の空襲で焼けた。しかし、朔太郎の長女葉子の著書『尋麻の家』に記載されていることなどから、この地こそが詩人が亡くなるまで住んでいた地であったと。丘なので見晴らしはよかっただろう。今も多くの家が電線真下に建てられている。

鉄塔と朔太郎との関連を調べ、記録しその意義を



風景資産として残せるよう力尽くされた先生方、ほんとうに頭が下がる。北沢川緑道を歩き、作家・森茉莉が通った珈琲店「邪宗門」にて解散。和気あいあいの楽しい散歩であった。
(友の会会員)

— 二〇二二年十月十日、十二日両日開催 —

国土地理院の地図等を編集・加工

今回ご参加の皆さん



参加者に説明する
きむら先生

講座 アイヌの苦悩と誇り―バチエラー八重子、
違星北斗の短歌を中心に―を受講して

若山 富士子

高峰秀子のエッセイ『年金花火』に、夫松山善三が船戸与一著『蝦夷地別件』に感動したくだりがある。私も興味に駆られその小説を読み感動し、それ以来、少しでもアイヌのことを知りたいと思った。

九月一日、安元隆子先生の講座「アイヌの苦悩と誇り」に出席した。『蝦夷地別件』の時代背景は寛政元年頃だが、明治の時代に入って一人のアイヌ口承文芸の翻訳者と三人のアイヌ歌人が誕生した。

・知里幸恵は明治三十六年生まれ。『アイヌ神謡集』を日本語に翻訳した。口承を知里が文字化したからこそアイヌの神話を今も、私たちは読むことが出来る。彼女こそが絶滅の危機に追い込まれたアイヌ伝統文化の復権・復活の先駆者なのだ。

・バチエラー八重子は明治十七年生まれ。彼女は短歌にアイヌ民族の想いを表現した。アイヌの誇りを忘れている人たちを励ます短歌として。

○ ふみにじられふみひしがれしウタリの名誰しか
これを取り返すべき

八重子はアイヌ語のみの短歌も作っている。アイヌの声をかき集め、書きとめ、声の力を短歌にしてアイヌの心を日本人に伝えたいと考えていた。短歌によって声の復権と日本人への橋渡しをしようとしたのである。

・違星北斗は明治三十四年生まれ。彼はアイヌ民族の地位向上のために一生を捧げた。アイヌとして自覚を持ち、和人に伍して劣らない立派な人間、社会に役立つ人間にならなければならないと考えた。

○ 勇敢を好み悲哀を愛してたアイヌよアイヌ今何処に居る

・森竹竹市は明治三十五年生まれ。

○ なぜこうもウタリは自身を卑下するか平等に生きやう自尊心持て

現実を嘆く短歌である。しかし、竹市は昭和四十一年に『アイヌ亡びず』でこう述べる。「彼等（＝アイヌ）は祖先から受け継いだ民族の特性、（中略）アイヌの風貌が現代から没しても、その血は！永遠に流るるのだ、日本人の体内に」と。

私は二年前に読んだ宇梶静江著『大地よ！』を思い浮かべていた。昭和八年生まれの彼女の人生こそが森竹竹市の云う通り、「アイヌ亡びず」である。彼女は民族の誇り、芸術性、勇気を持って日本の社会を生き抜いてきた。私は彼女の詩を最後に掲げたい。

大地よ / 重たかったか / 痛かったか

宇梶静江氏の人生の重さを深々と感じて胸が痛くなった。そしてこの講座で知里幸恵をはじめとした三人のアイヌ歌人の生涯の重さをも感じることができた。
~~~~~  
(友の会会員)

講座「中勘助の戦争児童文学」を聴講して

平出 洸

本年十月十六日、初めての東京都市大学人間科学部と世田谷文学館友の会共催の公開講座「中勘助の戦争児童文学」が催された。講師は友の会とご縁の深い同大学人間科学部児童学科の木内英実准教授。

まず中勘助は明治十八年生まれで日清、日露、第一次世界大戦及び日中戦争の四回に亘り戦争経験をしているが、『銀の匙』には小学生だった時の思い

出として、

先生はれいのしたり顔で「日本人には大和魂がある」といつていつものとほり支那人のことをなんのかのと口ぎたなく罵った。(略)自分がいはれたやうに腹にすゑかねて「先生、日本人に大和魂があれば支那人には支那魂があるでせう。(略)」と言って非国民のレッテルをはられたとのエピソードが載っている。然し戦前、戦中、戦後を通じ『銀の匙』は国語科の題材にもなり、大陸に戦う兵士達にも岩波文庫本が送られたのであった。その他、九十篇から成る戦争詩集も作っている。

戦後には、「山がつとはしばみ」(昭和二十三年)と題する印象深い詩がある。年老いた山がつ(木樵)が毎日山に行つて年老いたはしばみの木を切り倒すが、その樹は

(略)夏のさかりになつたときに／山がつは斧をさげてゆき／薪にして売るために／はしばみをきりはじめました／かつし／かつし／それでもはしばみは慈悲をすてず／彼のうへに枝葉をひろげ／涼しい蔭をおとしました／かつし／かつし(略)ずでんどう／あはれなはしばみ／むざんなはしばみ(以下略)

非常に感銘を受けるが、この詩の原点はインドの二大叙事詩のひとつであるマハーバータの「怨親平等」(おんしんびようどう)敵対した相手にも親しい人同様に扱う)にあるとの指摘には同感した。

木内先生は最後に中勘助の戦争児童文学の纏めとして、①親族を看取るという観点 ②「山がつとはしばみ」のヒューマニズム ③自然の力への敬慕、を挙げておられ、強く印象に残った。

(友の会会員)

## 世田谷区民ではないけれど…… 「越中「二上山」の麓から」 ～富山県より～

武部 弥十武

私は世田谷文学館友の会に、平成二十九年（二〇一七年）から入会させてもらっている。友の会は、「文学散歩・他文学館などの見学会の実施」などを含めて、多彩な事業を展開している。私も機会があれば、それらの催しに参加してみたいと思ったからである。

ところが、そう思っているうちに、次第に東京都内にコロナ禍が広まってきて、参加して感染し、周囲に迷惑をかけたくないという気持ちが強まってきた。それで残念ながらもまだ一度も参加せず、送られてくる友の会の「おしらせ」や「会報」などで、色々と教えられ、楽しませてもらっている。

私は富山県高岡市伏木の地に住んでいる。伏木の地は、富山県は呉西、二上山の麓にあり、いわゆる越中万葉の故郷である。富山湾に面し、海を挟んで東に、白雪抱く立山が見える。奈良時代、越中の国府があり、大伴家持は天平十八年（七四六年）七月末から満五年間、越中守として在任し、約二二〇首ばかりの歌を詠んでいる。

玉くしげ二上山に鳴く鳥の

声の恋しき時は来にけり

（万葉 巻十七・三九八七）

伏木には坂本信幸氏館長の「高岡市万葉歴史館」があり、高岡市は毎年十月初旬に、「高岡万葉まつり」を催して、「万葉集全二十巻朗唱の会」を行なっている。全国からの参加者も多い。

伏木にはまた、『広場の孤独』で芥川賞を受賞した堀田善衛氏の生家もある。

富山市には、中西進氏館長の「高志の国文学館」があり、多彩な事業が行われているが、平成三十年（二〇一八年）十月には、生誕一〇〇年記念特別展「堀田善衛―世界の水平線を見つめて―」があった。富山市はまた、ユニークな「富山市民大学」があるが、そこで私も講師として、『万葉集』や『古今集』『新古今集』を読んでいる。

早くコロナ禍が終息して、安心して友の会の色々な催しに参加できるよう心から祈るばかりである。

（友の会会員）



### 世田谷文学館こぼれ話

「没後十年井上ひさし展―希望へ橋渡しする人」

（二〇二〇年十月十日～十二月六日開催）

中垣 理子

「井上ひさし展―希望へ橋渡しする人」のポスターを覚えていらつしやるでしょうか。

井上さんの作品から、三人の担当学芸員が〈希望〉のことばを集めようと決め、ひたすら読み込んで選んだそのことば（文字）を用いて、デザイナーのアベキヒロカズさんが、井上さんの顔を描きました。デザインに使われた文字はすべて手書きで、文字のひとつひとつを、館の総務部・学芸部、職員総出で書き集めました。このメインビジュアルこそ、あの

時、あの状況で、〈せたぶん〉に登場してくれた井上ひさしさんへの、私たちの想いそのものでした。

本展を企画した開催の二年前、よもや新型コロナウイルスウィルス感染症がまん延し、日本国内の移動さえ困難な状況におかれるとは想像すらできませんでした。二〇二〇年は井上ひさしさん没後十年。ふるさとの山形・遅筆堂文庫をはじめ、各地の井上さんゆかりの地で展覧会を開催し、スタンプリーで全国を巡ってもらおうと、関係者一同張り切っていました。しかし、その計画に大きな壁が立ちました。

世田谷文学館も一時休館に追い込まれ、職員同士で交わされるべき議論もままならない中、館が再開されて久々に顔をあわせた私たちが考える「井上ひさし展」は、明らかにその前とは変わっていました。

井上さんの最後の戯曲『組曲虐殺』の中に、「絶望から希望へ橋渡しをする人がいないものだろうか……いや、いないことはない。」というセリフがあります。コロナ禍という世界的な困難、「絶望」が覆ったこの時期に触れる井上さんのことばは、その明るさと深さで私たちを包み、明日に向かう糧のように響きました。

「橋渡しをする人」その人こそ「井上ひさし」であることを思い知らされました。このことをあらためてお伝えしたいと願い、私たちの井上さんの〈希望〉のことば「集めが始まったのです」。

この展示のあり方が正解だったのかどうか、今もわかりません。ただひとつ確かなことは、困難を押してご来館くださり、静寂しか許されない展示室で、井上さんのことばと向き合い、対話してくださった皆さんのお姿を、私たちは決して忘れることはない、ということです。

（世田谷文学館学芸部長）

「世田谷文学館コレクション図鑑」のお薦め

堀 伸雄

文学館一階ミュージアムショップの一角に、グリーンの下地に文士たちのポートレートをちりばめた装丁の本が販売されている。昨年十月、開館二十五周年記念として当館が発行した「世田谷文学館コレクション図鑑」(税込一六五〇円)である。十万余点あるという収蔵品の中から選び抜かれた百余点が紹介されている。

内容は、作家の自筆原稿、創作ノート、書簡をはじめ、映画台本、愛用の日用品など多岐に亘る。写真が掲載されている森茉莉の犬のぬいぐるみは弟の森類に受け継がれることになったいきさつが紹介され、コレクション展での実物展示は注目に値した。北杜夫人へのロングインタビューの採録や、日本文学研究者、映画監督などの寄稿文は、世田谷と文学、映画の結びつきを歴史的視点から俯瞰してくれる。さらに心打つのは、広範囲の交流の証とも言える十九通の書簡やはがき。井上ひさし、室生犀星、井上靖などの書簡類は特に印象深い。これらは全て巻末に読み下し文が併載されているのも有難い。

また、各頁にはそれぞれの資料の意義を表す簡潔なキーフレーズが付されており、欄外の出典書籍や参考文献の記載も重宝、各資料ごとに定められたストーリーが伝わる工夫がされている。巻尾の「世田谷文学年表」を見れば、どの作家がいつごろ世田谷のどの辺を徘徊していたかも推測がつく。結果、この図鑑は単なる図録を超えた総合的資料集となっている。手元に置き、折に触れ翻けば、世田谷文学館に来る楽しみも一段と増すと必定。続刊を期待したい。

(友の会会員)

～こういう催しがありました～ (2022年4月～2022年10月)

| 月 日              | 講演・講座・散歩                                          | 講師・案内人                            |
|------------------|---------------------------------------------------|-----------------------------------|
| 2022年<br>4月9日    | 総会記念講演「ファザコンからの脱却——父・阿川弘之の生誕100年を迎えて」(文学館との共催)    | 阿川 佐和子氏<br>(作家・エッセイスト)            |
| 5月15日<br>5月18日   | 春季文学散歩「樋口一葉生誕150年 本郷で暮らした時代を辿る」                   | 松山 信洋氏<br>(文学遺跡探査者)               |
| 7月9日             | 文学館との共催講演<br>「人生百年時代のドストエフスキー」                    | 亀山 郁夫氏<br>(世田谷文学館 館長)             |
| 9月1日             | 講座「アイヌの苦悩と誇り —バチェラー八重子、遼星北斗の短歌を中心に—」              | 安元 隆子氏<br>(日本大学国際関係学部特任教授)        |
| 10月10日<br>10月12日 | 秋季文学散歩 朔太郎の「猫町」から時空を超えて<br>新開地「下北沢」を歩く            | きむら けん氏<br>(文化探査者・作家)             |
| 10月16日           | 東京都市大学人間科学部との共催公開文学講座<br>「物語はこうして生まれた 中勘助の戦争児童文学」 | 木内 英実氏 (東京都市大学<br>人間科学部准教授 博士・文学) |

エッセー「わたしの一冊」の原稿募集中!

- ・タイトルに本の題名(著者名・出版社名・出版年も)明記
- ・あなたのお名前、連絡先を明記
- ・字数は六〇〇字以内(厳守)
- ・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
- ・原稿はお返ししません
- ・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
- ・原稿は「友の会」に郵送かFAXでご送付ください

編集後記

はや、今年も暮れようとしています。皆さまにとってこの一年はどのようなお年でしたでしょうか。

振り返ると、世界が大きく揺らぎ不安な気持ちを抱きます。私たちはこれからも世界の動きに一層敏感になり、注視していかなければと強く思います。

視点を身近に移すと、友の会のこの半期は文学館との共催講演、講座そして散歩がそれぞれ二つずつと活気のある活動に帰ることが出来ました。

それらの催しから刺激を受けて、今年は長編小説を読む機会に恵まれました。落ち着いてじっくり本を読む楽しみはまた格別のものがあります。

(森 ゆり子)